

秋田県立図書館・秋田県公文書館

開館記念特別展

館蔵資料
で語る

秋田の歴史

●期間 平成5年11月2日火～11月30日火
午前9時～午後5時
(休館日/11月8日、15日、21日、23日、29日)

ふるさと秋田の人と本 館蔵貴重書展

●期間 平成5年11月2日火～11月7日日
午前9時～午後5時



●開館記念特別展示について●

このたび秋田県立図書館・秋田県公文書館の新築落成を記念して特別展示を催すこととなりました。

今回の展示は、特別展示室において享保一三年の領内給人町絵図を中心に、国典類抄、御亀鑑などの藩政文書や梅津政景などの藩士の記録などの古文書、秋田県庁開庁布告など明治以降の行政資料によって秋田の歩みを概観する『館蔵資料で語る秋田の歴史』を、多目的ホールにおいては「御曹子島渡り」、「嵯峨本伊勢物語」、「菅江真澄遊覧記」などの古籍による『館蔵貴重書展』を、研修室においては平田篤胤、佐藤信淵、根本通明、安藤和風、小牧近江ら郷土出身の思想家、文学者の作品による『ふるさと秋田の人と本』をそれぞれのテーマとして企画してみました。いずれも当館所蔵の資料のみによるもので、郷土秋田を考えるよき機会となれば幸いです。

県立図書館は創立以来九〇年の歴史を持ち、現在で四〇万冊を越える図書資料や数多くの書画軸、短冊の類を所蔵しており、これまで収集されたものの中には今日では求められない価値の高い資料があります。公文書館には佐竹文庫などの藩政文書、渡部斧松文書などの地方文書、その量と質で全国的に有名な明治以降の行政資料などが所蔵されております。それらは今後順次展示して県民のみなさんにご覧いただき、秋田県の歴史や文化の理解の一助として役立てていただければと考えております。今回の展示はその最初の試みになります。どうぞごゆっくりとご覧いただきたいと存じます。

平成五年一月二日

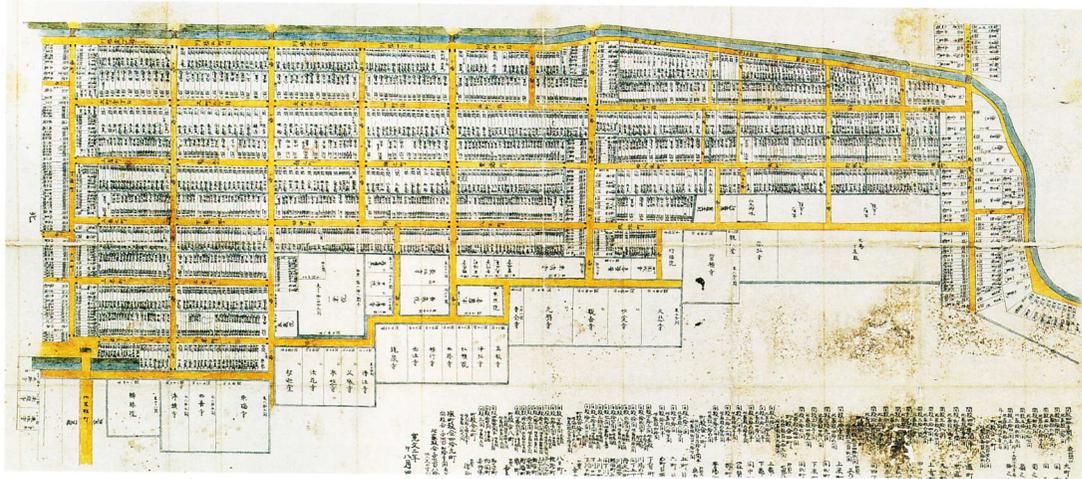
秋田県立図書館長
秋田県公文書館長

表紙解説

外町屋敷間数絵図

秋田県指定有形文化財

寛文三年
一六六三
七 cm × 二四.五 cm

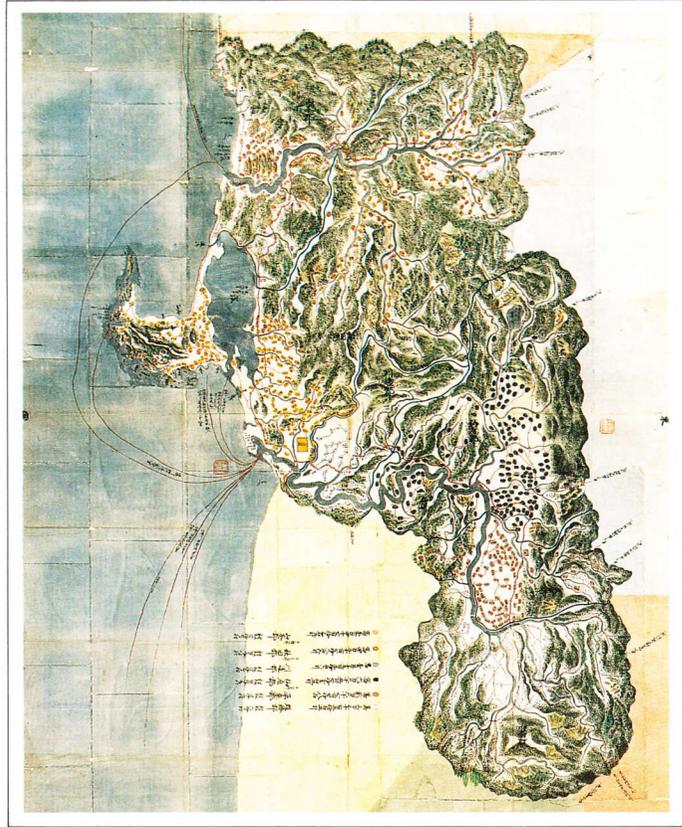


城下絵図では、一般に町方は簡略に描かれるのが常ですが、この絵図では、町人の名前や屋敷地の間口・奥行きが明記されており、その点で貴重な資料です。

久保田の町割は築城に伴い、内町、外町ともに進められました。外町で間口割を与えられた商人を本家商人と呼び、多くは土崎湊から強制的に移住させられた人々です。それら商人を核とした外町は政景日記や本図等から推定すると、寛永寛文期に完成し、以後大きな変化はなかったことがわかります。

一、佐竹入部と領域の確定

六郡絵図（製作年代不詳 一八〇cm×二〇四cm）



彩色豊かなこの絵図が、いつ作製されたかは不明です。

しかし、正保四年^{一六四七}の出羽国一國絵図を参考にしたようです。山本郡は本松山郡、秋田郡は本豊嶋郡、仙乏郡は本山本郡と注記され

ており、その上、六郡の村数や高は正保の国絵図とほとんど変化ありません。郡名の変更は寛文四年^{一六六四}ですから、正保国絵図をもとに、寛文四年以降さほど遠くない時期に作成されたものようです。



秋田藩家蔵文書（六一冊）

秋田藩家蔵文書は、元禄年間に佐竹義処の命により修史事業を主宰した岡本元朝が家中藩士等に伝わる古文書を写したものを出発点とします。この時に作成されたものは、四七冊でした。その後も藩士等よりの古文書の提出が行われ、家蔵文書は増補されました。このため本館所蔵の家蔵文書は、六一冊となっています。そのほか家蔵文書の一部は現在東京都の千秋文庫に所蔵されております。

蔵有院様御判物

佐竹氏は関ヶ原の戦後、常陸水戸から秋田に滅封のうえ所替になりました。しかし、その時の領知判物には「出羽国之内、秋田・仙北両所進置候、全可有御知行候也」と記されるだけで、知行高が明記されていませんでした。四代將軍徳川家綱は、寛文四^{一六六四}五年に諸大名・諸社寺に一齐に領知判物・朱印状を下付していますが、ここに提示の資料は、その際、佐竹氏に下付された判物の写で、はじめて所領が二十万五千八百石余と明記されています。

出羽国秋田山内河邊の平床
雄勝郡蔵拾石石野河内
所領高石内文石拾石都合
貳拾石五十八石餘領事如前
元禄一訖全領之状并

寛文四年正月廿

秋田藩家蔵

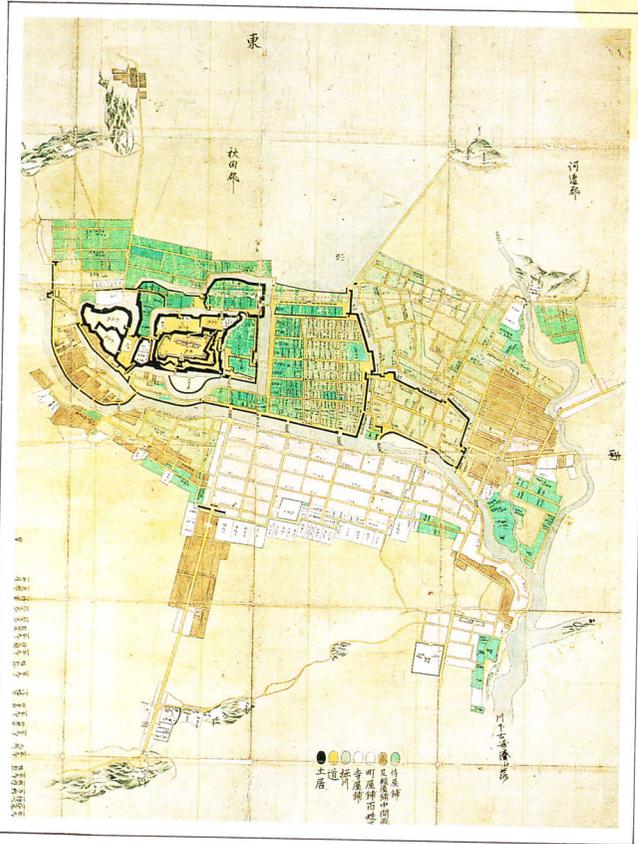
二、久保田城下町絵図と町人の記録

久保田城下絵図

秋田県指定有形文化財

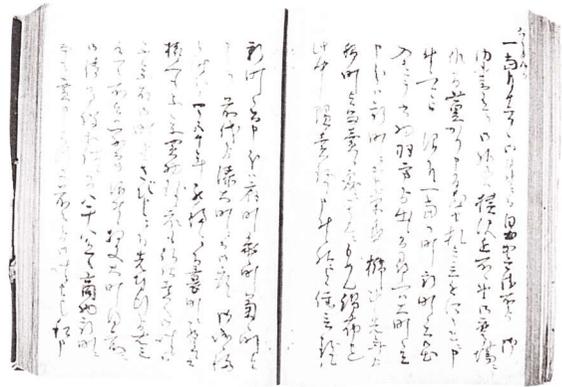
(宝暦九年
一七五九)

(10cm X 33cm)



(一七五八) 宝暦八年の三月、藩主義明が死去し、嫡子義敦^{あつたか}がわずか十一歳で襲封したため、幕府は領内監察のために国目付を派遣しました。その時に作製した絵図の一つが本図で、この他に、大館・横手の絵図も作製しています。

足軽屋敷や寺院等も色別されていますが、本図の最大の特徴は、軍事的に重要な諸郭の面積、土居の高さ、堀の幅などが注記されていることです。これが、給人町絵図と基本的に異なる点です。



梅津政景日記

秋田県重要文化財

梅津政景は、藩政初期に院内银山奉行・惣山奉行・勘定奉行・家老等を歴任した人物です。その日記は、個人の日記であるにも関わらず、公務の記事が多く、秋田藩成立期の事情を、行財政・民政・軍事等の多方面から窺い知ることができる貴重な記録です。その重要性から、藩政時代以来「国典類抄」等多くの編纂物に引用されていますが、現代においても、諸藩体制研究に欠くことのできない史料として利用されています。

大町三丁目記録

大町三丁目記録とは、外町の中心である大町の町役人が書き継いできた記録で「永代帳」「諸方入銭帳」「歩伝馬過銭之控」等の諸帳をいいます。延宝四年(一六八六)から明治一六年までの長期にわたる記録で、昭和三八年に大町三丁目町内会より秋田図書館に寄贈され、今回、公文書館に移管されました。

ここに示した史料は、元禄元年(一六八八)に在方商人の直接領外取引を禁止し、大町商人を仲介するように指示した記事であり、秋田における大町商人の優位性を示しています。

三、検地について



古今検地之大意

検地について

秋田藩では、領内の総検地が三回実施され、それぞれ先竿・中竿・後竿とよばれています。

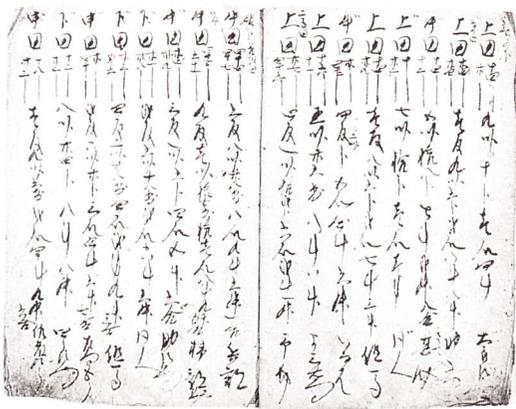
先竿は入部直後の慶長八年、中

竿は慶長一九年頃、後竿は正保四年（慶安元年）に行われ、以後は個々の村の状況の変化に応じて打直し検地が行われました。

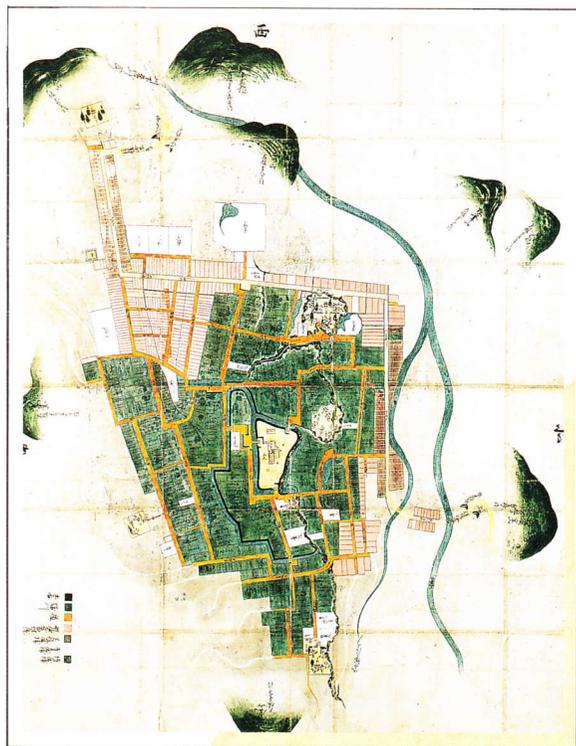
検地の実施後、各村には「物成並諸役相定条々」（いわゆる「黒印御定書」）が公布され、貢租に関する細かな規定等の農村支配の方針が示されました。

初期の検地を指導した一人が刈和野で組下支配をしていた渋江政光です。彼の遺著といわれている「御当国御格式検地秘伝之書」に注釈の貼紙を付した体裁のものここに展示した「古今検地之大意」です。

松内小猿辺之内七日市村御検地帳



四、大館絵図



大館絵図

秋田県指定有形文化財

（享保十三年 一四 cm × 一七 cm）
（一七二九）

藩では、享保十三年に十二所、

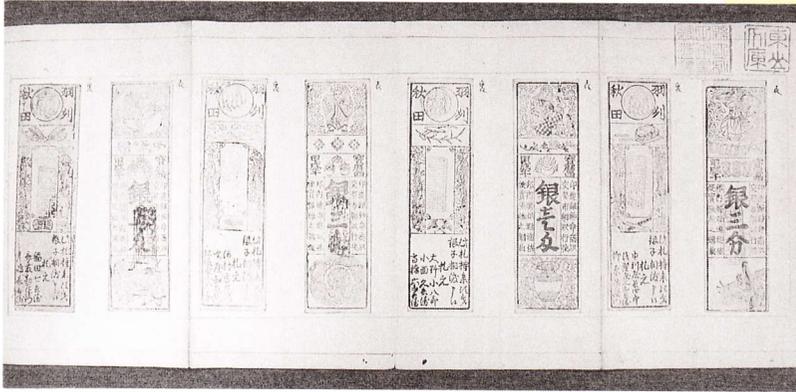
大館、松山、刈和野、角館、横手、角間川、湯沢、院内の外、能代の絵図の作製を命じています。現在、角間川の絵図は不明、能代町絵図は能代市役所で所蔵しており、それ以外は、当館で所蔵しています。

大館の所預は佐竹一門の佐竹石見（西家）です。石見の組下給人と石見の家臣は区別して記載され

ており、どちらの屋敷地も緑色で彩色され、氏名、屋敷地の面積がわかります。足軽は、屋敷割はさかれていますが、氏名・面積の記載がありません。城地は薄黄色、土居は黒色、足軽屋敷は茶色、町屋敷・百姓屋敷は桃色、寺院は白色に彩色されています。以上のことから、これらの絵図は給人の屋敷割を明らかにするのが主目的であったことが推測されます。

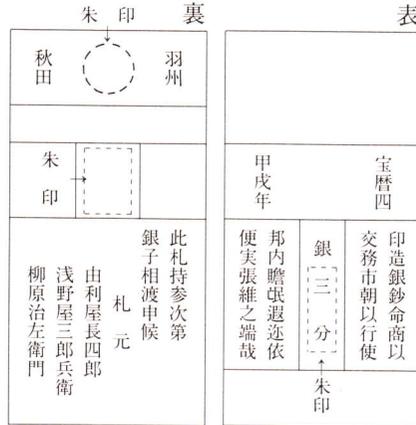
五、宝曆事件

宝曆四年秋田領内通用銀札

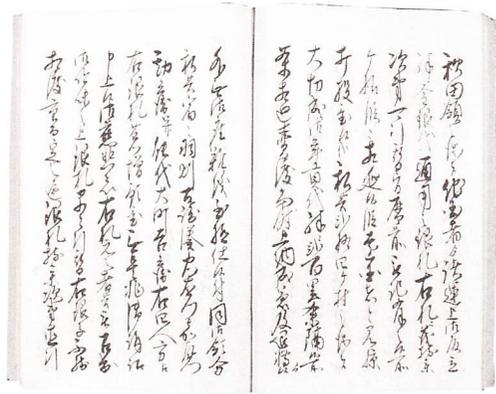
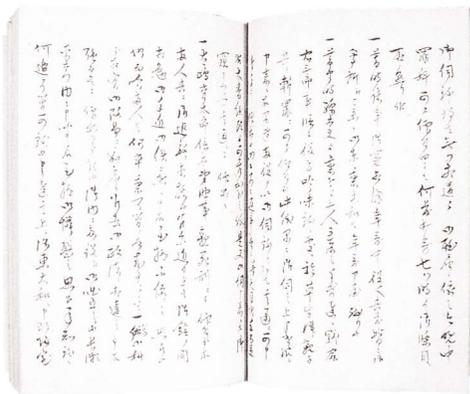


藩財政窮乏打開のため、宝曆四年七月幕府から許可され、同十二月に銀札仕法を定めて、翌五年二

銀札の図



月から発行された最初の藩札です。発行総額は九万六一八〇貫目余(金一六〇万両余)で、札元は領内の御用聞町人、地主など三十四名です。兌換藩札だったので、現実には兌換は実行されず、却って経済混乱を招き、「美濃国茶売事件」が発生しました。それに藩首脳の間で対立抗争が激化し、藩主の相統争いも加わり、「宝曆事件」(銀札事件・秋田騒動)までひき起こすことになりました。結局、銀札は宝曆七年七月八日、廃止されました。



「美濃国多羅郷百姓茶代銀御引替無之二付御判申受罷下候節札元并湊小宿共贈答一件」

美濃国の茶商が茶代不払につき、秋田の札元三十四人を江戸の奉行所に訴えてから解決に至るまでの資料を一冊にまとめたものです。内容は、江戸の奉行所への訴状及び召喚状、札元と茶商人の対談の覚、口上書、茶代受領書、報告書等からなっています。

北家御日記

秋田県指定有形文化財

角館の所預であった佐竹北家の公私日記で、延宝二年(1724)明治二十七年の記録です。内容は一族の動静、他家との交際、諸行事、家臣、組下給人に対する指示、久保田や江戸での御用記録など公私両面にわたっており、藩政の展開を知る上で貴重な資料です。

なお現在、当館で翻刻作業が進行中です。

六、横手絵国と戸村十太夫

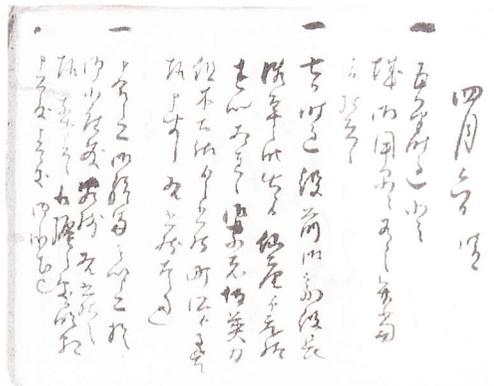
横手絵図（享保十三年 一七二九 一冊 150cm X 330cm） 秋田県指定有形文化財



横手の所預は佐竹一門の戸村氏で、その他、向氏も組下支配をしていました。

この絵図には、内町に給人の氏名、屋敷地の面積が記載されています。しかし、戸村氏の家臣名は

記されていません。外町は屋敷割されていますが、名前や面積は不明です。城地は黄色、土居は黒で侍・中間・町屋敷などは白で彩色され、山や木は絵画的手法で描かれています。



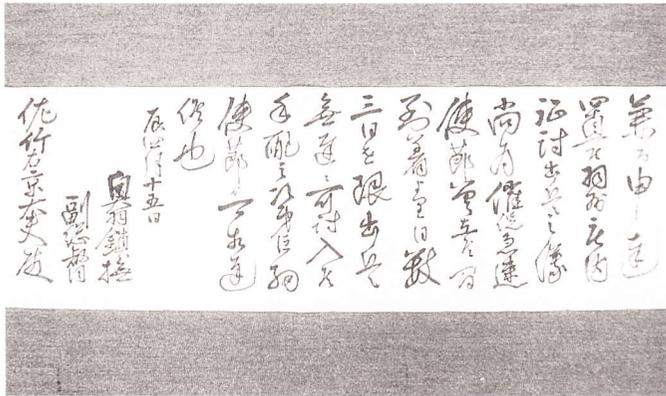
仙台御用日記

横手町は所預戸村氏の城下町です。戸村氏は佐竹一門で、幕末に十太夫義効は本藩の家老職に就いています。

明治政府が奥羽鎮撫の軍を進めるとき、東北諸藩は白石（現宮城県）に集まり、会津・庄内援護の同盟を結びました。その時、戸村十太夫は藩を代表して盟約書に血判を押しています。「仙台御用日記」は、十太夫が白石会議に出席するまでの経緯が記されています。又、「奥羽鎮撫副総督書状」では、秋田藩に対し庄内征討軍の派遣を催促しており「三日を限出兵」するようにも記されています。

その後秋田藩は東北諸藩と離反し、その結果秋田領内は東北諸藩の侵攻するところとなって、横手城は庄内藩の攻撃をうけ落城焼失しました。

本館所蔵の「戸村文庫」には戸村十太夫関連の古文書が多数含まれており、戊辰戦争関係の貴重な資料となっています。

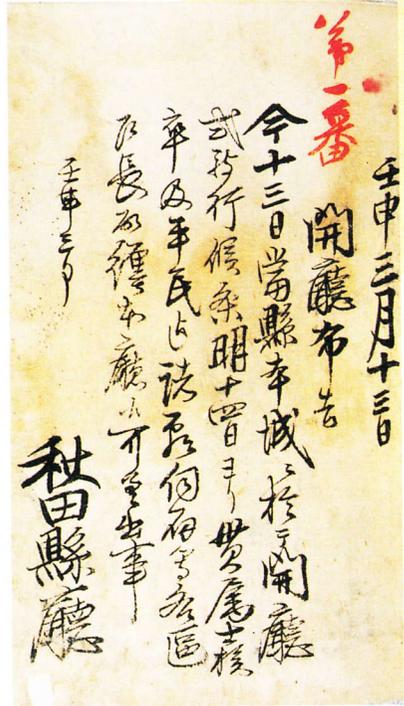


奥羽鎮撫副総督書状

奥羽鎮撫副総督書状
 仙台御用日記
 佐竹京本史道

八、近代の秋田

1 秋田県の成立



開庁布告

2 明治初期の教育

官立学校設立伺

一 学校位置

第七大學區第十三番中學校區内秋田縣管

下第六大區四小區羽後國平鹿郡今宿村

一 学校名稱

今宿学校

一 學科

尋常小學校

一 教則

本縣傳習學校教則ニ據ル

官立学校設立伺

〔八七三〕
明治六年、秋田県は学制に従が
い、県内を四中学区八三二小学区
とする計画を文部省に提出しまし
た。しかし、経済的負担が大きい
ことから、明治十一年までに県内
で設立された小学校は四〇五校に
すぎません。
当初、校舎には村落の社寺や部
屋数の多い民家が借用される場合
が大半でした。今宿学校はその一
校で、現在の雄物川町今宿の蔵伝
寺の庫裏を校舎として開設されま
した。

〔八七三〕
明治六年、徴兵令が發布され、
成年男子に兵役の義務が負わせら
れました。しかし、徴兵告諭の文
中に「血税」という言葉があった
ため動揺が広がりました。秋田県
でも、同七年、平鹿郡阿気村（現
大雄村）で徴兵令反対の農民騒動
がおこりました。この告諭は、こ
れらの騒動の再発を防止するため
出されたものです。農家にとって
は貴重な労働力を奪い取られる兵
役の負担は大きく、徴兵忌避の動
きもみられました。

3 徴兵令

告諭

今般陸軍省第三百五号御達趣モ有リ嘉永
三戌年二月十六日以後同六丑年二月十九日以前訖
生者徴兵トシテ取調後処年齡二十五ヨリ三十五迄ノ
者ハ譬ヒ一家ノ主人又ハ獨子獨孫嗣子或ハ事故アツテ
父兄ニ代リ家ヲ治ル者トモモ一切免役相成ニス
外國負債ノ为右人教ヲ取調或ハ生血ヲ絞リ取ラレ候
杯無根ノ巷説ヲ信ヒ一時疑念ノ餘リ遂ニ多人教集
合騷立候村々之レアリ實ニ不悻朝憲所業不届ノ次
第ニ付首魁ノ者捕縛此上糾問嚴重ノ可及所置候

徴兵告諭

◆ 館蔵貴重書 ◆



御曹子鳥わたり

御曹子鳥わたり

繪巻一卷。唐草紋金らん緞子装丁。鳥の子料紙を用い、彩色の挿絵と本文が交互に配されています。室町時代から江戸時代初期にかけて作られた物語草子を総称する御伽草子の一つで、義経伝説にちなんだ御曹子の兵法書奪取譚です。この絵巻は土佐絵風の手法で描かれた、江戸時代初期のものと思われまます。

嵯峨本 伊勢物語

嵯峨本 伊勢物語

慶長十三年（一六〇八）刊の古活字本。上下二冊。表紙は草花鳥獸模様摺込。伊勢物語の嵯峨本には何種類かありますが、本書は最初の版のもので、本阿弥光悦が挿絵の版下を描き、木活字の書体は光悦流とよばれる流麗なものです。

嵯峨本は、慶長期の後半、京都の嵯峨で光悦とその門下の角倉素庵により出版されたもので、用紙、挿絵、装丁に美術的な意匠をこらしているのが特色です。

特に、本書のように光悦が版下を描いたものは光悦本ともいわれまます。

宇津保物語

延宝五年（一六七七）刊。二〇巻三〇冊。若草色地唐草模様摺込表紙。平安時代中期の物語で、作者は不詳ですが、成立は源氏物語より早く、一〇世紀後半の成立とみられております。

栄花物語

写本、四〇冊。書写年代不詳。嫁入本とも称される紺地秋草紋浮織表紙。本文は鳥の子料紙に流麗な平仮名で書写されておりまます。藤原道長の栄華を主とした二百年にわたる世継物語です。

承久記

写本。上下二冊。この本の箱書きから、一七五〇〜六〇年頃、あるいはそれ以前の書写と推定されます。外題は「承久記」、目次、内題は「承久兵乱記」と記されています。内容は承久三年（一二二二）の承久の乱の顛末を描いたもので、原本の成立は乱後間もなくと言われております。

無言抄

慶長三年（一五九八）刊の古活字本。三巻三冊。編者は木食上人。黄土色地に銀泥唐草模様摺込表紙。内容は連歌の賦詠のための守るべきまじりを書いた式目です。慶長二年に紹巴の校閲を受けてから刊行され、当時の最も整備された式目として評価されました。

貴ふ祢

年代不詳。上下一冊。紺紙金泥草花模様摺込表紙。茜色題僉紙に「貴ふ祢」とあります。室町時代末期から江戸初期にかけて描かれた奈良絵を挿絵とした、絵本の一冊です。内容は京都貴船大明神の縁起を書いた怪婚説話です。



貴ふ祢



どしどし本は下りにやると、とては、
言ふに、行は、も、は、た、
く、た、た、た、た、た、た、
き、は、た、た、た、た、た、
る、は、た、た、た、た、た、
ふ、く、く、く、く、く、
と、も、も、も、も、も、
は、た、た、た、た、た、

伊勢物語の嵯峨本は、
門一、世、世、世、世、世、
不、同、と、必、以、天、地、を、
皆、心、を、以、て、可、也、と、
之、を、以、て、下、下、也、
版、下、と、流、麗、な、書、
体、と、し、て、

慶長十三年刊

光悦

三礼攷註

一四九三年刊。六冊。著者は岩澄。三礼とは周礼、儀礼、礼記の三書の合併名称です。当館所蔵の唐本のうち最も古い版本で、明版と称されます。「明德館図書章」の蔵書印があります。

六臣註文選

慶長十二年（一六〇七）刊の古活字本。蕭統撰。三二冊。藍地空押文様入表紙。内容は中国春秋末から六朝・梁までの作家の詩賦・文章の集大成に註を加えたものです。本書は上杉家の重臣直江山城守兼統が要法寺日性に刊行を依頼したもので直江版と称されるものです。



六臣註文選



古写本 論語

室町時代末期の写本。二冊、浅葱色地薄表紙。本文は罫入。論語注釈を書写したもので、朱筆書入れがあり、桐箱入りで箱書きに「古写本論語 羽嶽藏」と根本通明自筆の署名があります。



古写本 論語



菅江真澄遊覧記

菅江真澄遊覧記

写本。一〇三冊。原本の成立は文政年間（一八一八〜三〇）。菅江真澄は宝暦四年（一七五四）三河生まれの旅行家、民俗学者で、享和元年（一八〇一）秋田に来ました。文政五年（一八二二）それまでの日記類を藩校明德館に献納。文政七年〜十二年に藩命で編纂した地誌「雪の出羽路」「月の出羽路」なども文政十二年（一八二九）没後に献納され、これらは「真澄遊覧記」と称されております。当館所蔵のものは写本ですが、原本は国の重要文化財に指定されております。

阿証上人百首

阿証上人百首
一卷。慶安三年（一六五〇）。芳楊軒阿証の直筆。阿証は慶長一五年（一六一〇）佐竹義重の第五子として出生。後に長兄義宣の養子となりましたが、出家しました。正保三年（一六四六）京都の仁和寺子院の尊寿院を再興。明暦二年（一六五六）没。阿証が春夏秋冬、花鳥風月を詠んだ歌から百首を集めたものです。

春夏秋冬の画

平元梅隣先生歌

春夏秋冬の画
一卷。平元幾秋書。宝暦年間（一七五〇頃）。梅隣の春夏秋冬の和歌を、幾秋が書と絵で描いたものです。和歌を詠んだ梅隣（万治三年 一六六〇〜寛保三年 一七四二）は、長崎遊学後京都で医師となり後年帰郷。漢学、俳句、和歌にすぐれた才人でした。幾秋（正徳三年 一七一三〜宝暦五年 一七五五）は、叔父梅隣に育てられ、其角派湖十の門人。秋田藩勤定奉行を勤めました。

先人遺墨

江若澹園「秋空鷹影図」

大館市 漢詩、和歌。明治一一年秋田遐邇新聞編集長。雑誌・歌集編集

梅津憲忠「夢想之連歌」 対幅

元和元年秋田藩家老、弟の政景と秋田藩の基礎づくりに功績を上げる。

賀藤景琴画「荷上場之図」 外

秋田藩木山方吟味役 父・景林と共に能代海岸に松の植林をおこなう。

吉川五明「俳句・田に山に……」

秋田那波家から出て吉川家を継ぎ、天明期俳諧の頂点に立つ。

平元謹齋書「宋張思叔座右銘」

漢学者、秋田藩学館教授、軍事頭として蝦夷警固に当る。江戸邸侍講。

牧野梅隱画「富士図」

本莊市、狩野派画家。養父永昌から学んだ後京都に上り青蓮院で修業。

益戸滄州画「桃花図並賛」 対幅

談林派俳人、江戸邸で佐竹義敦の用人となる。角館に私塾致道館を開く。

小川歙齋画屏風

画家。文晁流で、中国趣味の濃い人物画や花鳥を多く描いた。

秋田藩士貼交屏風

ふるさと秋田の人と本

『西洋薬物考』上、中、下（自筆稿本）
『草木六部耕種法』（自筆稿本）
『混同秘策』前、後 寅寅楼 明治21年
『佐藤信淵家学全集』上、中、下 岩波書店 平成4年 復刻版

羽後町生。江戸時代後期の経済学者。農政学の大成に努め、各地で農業物産の指導に当る。医薬業にも従事した。

『西仙北町刈和野生。明治易学の最高峰。藩校明徳館学長のち、東京帝国大学教授。本県初の文学博士。』

『老農晚耕録』 秋田県振興会出版部
『適産調将来心得』上、下 明治34年
『稲種得失辨』 明治34年

『老農晚耕録』 秋田県振興会出版部
『適産調将来心得』上、下 明治34年
『稲種得失辨』 明治34年

『短歌短冊』 あふ事のもとふならずは呉服とり
あやぐもものは思はさるまし
『短歌軸装』
『すま女』の消息
後藤逸女の書写本

『周易講義』二、四 嵩山堂 大正元年
『周易象義辯正』巻首、二 明治34年
『老子講義』 博文館 明治35年
『伯夷伝考』
『周易三十六変復古筮法』 明治30年

『周易講義』二、四 嵩山堂 大正元年
『周易象義辯正』巻首、二 明治34年
『老子講義』 博文館 明治35年
『伯夷伝考』
『周易三十六変復古筮法』 明治30年

『石川理紀』のすけ
りき 秋田市金足生。明治時代の農村指導者で秋田県種苗交換会を創始。貞直の号で歌を詠み、著書も多い。

『老農晚耕録』 秋田県振興会出版部
『適産調将来心得』上、下 明治34年
『稲種得失辨』 明治34年

『草木谷 庵の手鍋』 明治31年
『石川翁百歌集』（直筆色紙帖）

『天外天』 六郷町生。本名為藏。作家。斎藤緑雨の知遇を得、写真主義作家としての地位を確立。昭和一三年芸術院会員。
『小杉』 慶応元年(1865) ~ 昭和27年(1952)

『戀と戀』 春陽堂 明治34年
『にせ紫』 前篇、後篇 明治38年
『藤娘』 講談社 昭和2年
『銀笛』 実業の日本社 大正6年
『くだん草紙』 海口書店 昭和23年

『湖南』 鹿角市毛馬内生。本名虎次郎。東洋史学者。大阪朝日新聞主筆。京都大学教授。東洋史学の発展に大きな足跡を残す。
『内藤』 慶応2年(1866) ~ 昭和9年(1934)

『涙珠唾珠』 東華堂 明治30年
『研幾小録』 一名支那学叢考』 弘文堂書房 昭和3年
『日本文化史研究』 弘文堂書房 昭和5年
『内藤湖南全集』 全一四巻 筑摩書房 昭和44年 ~ 51年

『秋田五十年史』 秋田郷土会 昭和7年
『秋田の土と人』 人の巻、土の巻 秋田郷土会 昭和6年
『和風句集 仇花』 昭和5年
『俳諧新研究』 中央出版協会 大正6年
『旅一筋』 大正15年

『秋田五十年史』 秋田郷土会 昭和7年
『秋田の土と人』 人の巻、土の巻 秋田郷土会 昭和6年
『和風句集 仇花』 昭和5年
『俳諧新研究』 中央出版協会 大正6年
『旅一筋』 大正15年

『外宙』 仙北町払田生。作家。『新小説』を主宰し、非自然主義を唱道。後年秋田時事社長、六郷町長として活躍。
『後藤』 ちゆうがい 慶応2年(1866) ~ 昭和13年(1938)

『腐肉団』 春陽堂 明治33年
『思ひぎめ』 橋南堂 明治40年
『秋田戊辰勤王史談』 秋田県振興会出版部 大正4年

『銀月』 秋田市生。本名銀二。作家。二十七才で万朝報記者。波乱に富んだ人生経験を生かし、流行文筆家として活躍
『伊藤』 ぎんげつ 明治4年(1871) ~ 昭和19年(1944)

『美的小社会』 新声社 明治35年
『人情観的 日本史』 文禄堂書店
明治37年

『小説 町の仙女』 金色社 明治37年
『怒 涛』 日高有倫堂 明治42年
『日本警語史』 実業之日本社 大正7年

『露月』 げつろ 雄和町女米木生。本名祐治。正岡子規に師事し、俳人として活躍。帰郷後医師として開業。『俳星』を創刊。
『露月句集』 青雲社 昭和6年
『露月文集 蝸を聴きつつ』 文川堂 昭和10年
『露月先生書翰』
『俳星』 二巻六号、再刊一卷一号〜三号

『田口』 たぐち 角館町生。本名鏡次郎。作家。美術評論家。家庭小説とよばれる『伯爵夫人』はベストセラー。雑誌『中央美術』発行。
『家庭小説 女夫波』 前篇、後篇 金色社 明治37年
『仕合者』 春陽堂 明治42年
『第一人』 春陽堂 明治44年
『ふたおもて』 前篇、後篇 新潮社 大正5年

『穂』 ひやくすい 角館町生。本名貞蔵。日本画家。帝国美術院会員。東京美術学校教授。アララギ派の歌人としても有名。
『平福』 ひらふく 明治10年(1877)〜昭和8年(1933)

『日本洋画曙光』 岩波書店 昭和5年
『平福百穂画集』 岩波書店 昭和10年
『平福百穂画集』 集英社 昭和53年
『歌集 寒竹』 古今書院 昭和2年
『竹窓小話』 古今書院 昭和10年

『陰』 いん 秋田市生。本名哲太郎。雑誌『中央公論』編集主幹。俊敏な選択眼で多くの新進作家を発掘。総合雑誌の黄金時代を築いた。
『滝田』 たき 明治15年(1882)〜大正14年(1925)

『木佐木日記』 滝田樗陰とその時代
『木佐木勝著 図書新聞社 昭和40年
『滝田樗陰 ある編集者の生涯』 杉森久英著 中央公論社 昭和41年
『滝田樗陰追憶記』 中央公論 大正14年12月号

『野』 けんごう 秋田市土崎生。本名賢蔵。作家。大正10年小牧近江らと『種蒔く人』を創刊。大正一三年『文芸戦線』に参加。
『今野』 いまの 明治26年(1893)〜昭和44年(1969)

『薄明のもとに』 新潮社 大正14年
『短篇集 汽笛』 鉄道生活社 昭和3年

『黎明に戦ふ』 春秋社 昭和11年
『開田の光』 新潮社 昭和19年

『近江』 おうみ 秋田市土崎生。本名近江谷。仏文学者。大正一〇年『種蒔く人』を創刊。プロレタリア文学運動出発期の中心的存在。
『小牧』 こまき 明治27年(1894)〜昭和53年(1978)

『ふらんす大革命』 黄土社 昭和24年
『ある現在史 種蒔く人前後』 法政大学出版局 昭和40年
『イソップ三代目』 第三文明社 昭和48年

『洋文』 ようぶん 秋田市土崎生。プロレタリア作家、劇作家。大正一〇年『種蒔く人』を創刊。演出家としても活躍。
『金子』 かね 明治27年(1894)〜昭和60年(1985)

『鷗』 かみ 金星堂 昭和13年
『金子洋文創作集 銃火』 春陽堂 昭和3年
『飛ぶ唄』 平凡社 昭和4年
『金子洋文作品集』 一、二 筑摩書房 昭和51年
『貉』 しほ 自筆原稿 大正13年

『山田順子』 やまだじゅんこ 本荘市生。本名順。竹久夢二、徳田秋声らとの交流があり、特に秋声の作品に大きな影響を与えた。
明治34年(1901) 昭和36年(1961)

『神の火を盗んだ女』 紫書房 昭和12年
『欲望と愛情の書』 紫書房 昭和14年

『伊藤永之介』 いとうえいすけ 秋田市生。本名栄之助。作家。戦後の農民文学の代表的な作家。『鶯』で昭和一四年新潮社文芸賞を受賞。
明治36年(1903) 昭和34年(1959)

『小説集 鶯』 改造社 昭和13年
『熊』 東亜公論社 昭和14年
『雁』 春陽堂書店 昭和14年
『警察日記』 小説朝日社 昭和27年
『谷間の兄弟』 東方社 昭和30年
『南米航路』 角川書店 昭和32年

『津世子』 つせこ 五城目町生。本名ツセ。作家。第一創作集『神楽坂』で認められた。女性の心のひだを繊細に描くのを得意とした。
明治40年(1907年) 昭和19年(1944)

『小説集 神楽坂』 改造社 昭和11年
『仮面』 版画荘 昭和12年
『花蔭』 実業の日本社 昭和14年
『女心拾遺』 筑摩書房 昭和16年
『矢田津世子全集』 小澤書店 平成元年

